

# 松江藩の医師と医術

## ——田代家と芦田家——

### たしろ そうでん やくし によらい 田代家相伝の薬師如来

田代家は一族で鳥取藩と松江藩に仕えた医者である。江戸時代後期、国学者・本居宣長の門人として古物を愛で、和歌や漢詩、学問、音楽を究め、伯耆国米子（鳥取県米子市）の文化活動を担った鳥取藩医、44歳の田代恒親（1767～1821）は、田代家相伝の薬師三尊と十二神将を覆う新たな薬師如来坐像を制作した。

田代家の先祖は、室町時代に中国の最新医学（李朱医学）を日本にもたらした田代三喜（1465～1544）で、僧医でもあった三喜は、その医術に仏教的な要素を含んでいた。施術には、「医王」たる「薬師如来」の存在をみる点に特徴がある。三喜の弟子・曲直瀬道三は、三喜の仏教的な要素を除き、甥の玄朔と共にその医学を日本化し江戸時代の漢方医学の一大勢力となっていく。

田代恒親が制作したこの薬師如来坐像の体内銘文には、薬師如来を「医王の肖像」としており、三喜の思想に通じる。この恒親が制作した薬師如来坐像、及び体内に納められた相伝の薬師三尊と十二神将は、三喜の思想を受け継ぐ家ならではの仏像といえる。恒親の叔父の家が松江藩医となり、松江の田代家は恒親の弟達を二度も養子に迎えようとした。薬師如来坐像の敷板裏面には墨書銘があり制作年代がわかる。①薬師如来の姿は、苦しむ人々に仏法を与える瑠璃の定印を結んだ坐像姿で、②伯耆国倉吉（鳥取県倉吉市）の仏師・西尾文朝が文化7年（1810）3月に制作し、③その制作技法は、平安時代後期の仏師で、宇治の平等院本尊の阿弥陀如来坐像を制作し寄木造技法を完成させた定朝（?～1057）の流れを汲むことを記す。



薬師如来坐像 敷板裏面

薬師肖像 与法業苦衆生之  
相瑠璃之定印  
結迦趺座  
夫真影雖有擁護、若無妙相者、終不能發、於茲吾相定朝法印、既發大智、真像造立、而以施其業法、十方具相好印明者、儀軌故、雖為秘密、予窺其真相、剛精思之工夫、為謹巧者皆以先傳之輔也、普業法興隆而以著肖影焉而結大因緣本源自性天真仏之妙理得達而大乘之仏身可奉持者也、  
倉吉仏師 西尾文朝謹識  
文化七年午三月

さらに、薬師如来坐像の体内には、小型の薬師三尊と十二神将が安置され、坐像背面の蓋内側の墨書からその由来がわかる。具体的には、①文化7年（1810）に西尾文朝に依頼し、新たに薬師如来坐像を制作したこと、②この薬師如来は「医王之肖像」であること、③その体内には、田代家が代々相伝した薬師如来（薬師三尊）を安置すると記す。



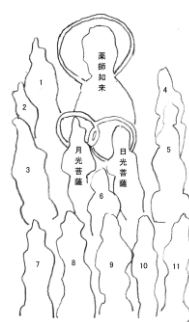
薬師如来坐像背面と体内仏

文化七庚午之年使  
西尾文朝作、此医王  
之肖像、田代家相伝  
之薬師如来安置其  
中者也、於伯州三代目  
田代元春恒親

背面蓋内側の墨書



薬師三尊と十二神将



十二神将は一体欠

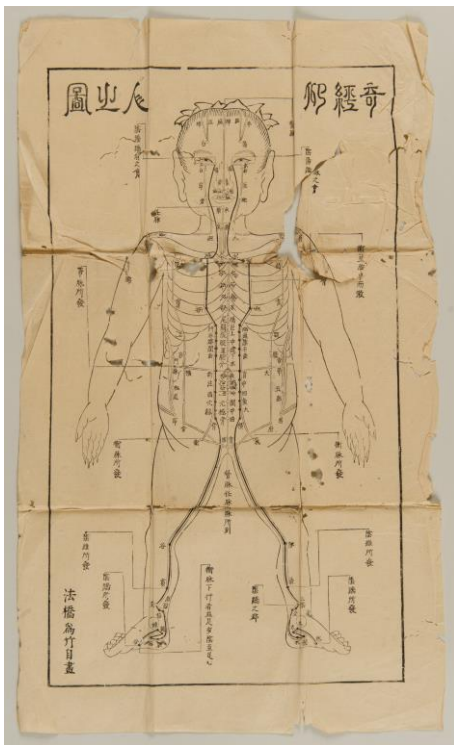
参考文献 西島太郎「松江・鳥取藩医田代家の薬師如来坐像」(『松江歴史館研究紀要』9、2021年)

## あしだ しんじゅつ 芦田家の鍼術

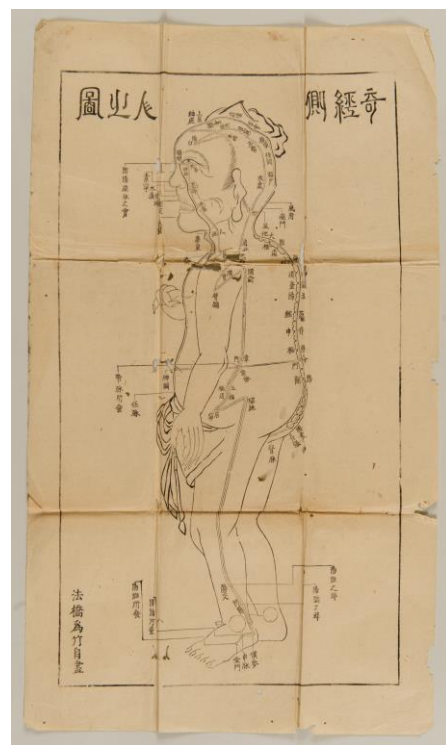
芦田家は松平家松江藩の初代藩主・松平直政に鍼術（はり。金属製の細い針を刺して病気を治す療法）で召し出され、歴代、松江藩の医者として仕えた。松江市名誉市民の俳優・芦田伸介（1917～99）の生家にあたる。218点の古文書のうち55点が鍼灸関係である。

江戸時代初頭、出雲国の匹地喜庵が、中国から長崎へ来日していた杏琢周に大明流鍼術（琢周流）を学んだ。その後の松江藩では、大極流、南蛮流、意斎流、琢周流など様々な鍼灸術が施術されていた。芦田家では、当初、美作国津山（岡山県津山市）から意斎流等を持ち込み、のち琢周流の鍼術を用いるようになった。

参考文献 渡部良平・梶谷光弘「大明流鍼灸の伝授者 杏琢周の来日の事実について」(『古代文化研究』26、2018年)。渡部良平・八幡一寛「松江歴史館所蔵 芦田家文書目録」(『松江歴史館研究紀要』7、2019年)。長野仁「日本における腹診の形成史(中)」(『漢方の臨床』62-7、2015年)



奇経仰人之図



奇経側人之図（江戸時代）

身体を縦に流れる通常の経脈（正経）ではない奇異な経脈（奇経）を示す図

展示品は全て松江歴史館所蔵